

令和 6 年 5 月 27 日現在

機関番号：13902

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2022～2023

課題番号：22K20018

研究課題名（和文）中世末期から近世初期における武家文芸の研究 - 連歌・和漢聯句の伝播と受容 -

研究課題名（英文）A Study of Provincial Warriors and the Literary Arts in Medieval Japan: the spread and acceptance of Renga and Wakan Renku

研究代表者

川崎 美穂（Kawasaki, Mion）

愛知教育大学・教育学部・助教

研究者番号：60965010

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：中世後期から近世初期における武家の文芸がどのように展開したのか、この時期を代表する武家上杉氏の文芸活動を中心に明らかにした。具体的には、連歌・和漢聯句の創作時に上杉氏の家宰直江兼統が参照していたと思われる『直江韻書』と、武家らの指導的立場にあり直江と昵懇であった連歌師里村紹巴に關係する論書『紹三問答』を分析の対象とした。前者は本研究補助により内容分析の素地が整った。後者は、諸本全ての調査及び紙焼き収集が完了し、新たに見出した書簡の分析を通して、従来呈されてきた偽書の可能性を否定し、近世初期の連歌史上において看過できない重要な資料であるとの成果を得た。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、主に山形県米沢市の図書館・博物館・寺社が有する文芸資料の博捜を通して、戦国期に活躍した武家上杉氏の知的教養の実態を、実作（連歌・和漢聯句の作品）と学書（『直江韻書』『紹三問答』『文鑑』）との影響関係及び連歌師（里村紹巴）と武家（上杉景勝・直江兼統）との社会的役割を解明した点に学術的意義がある。資料の分析に際しては、従来、注目されてこなかった明治期の郷土資料家が残した二次資料を精査したことで、山形県米沢市の地域文化財の活用に寄与した点で社会的意義を果たした。

研究成果の概要（英文）： I analyze the literature of provincial warriors who were active from the end of the Middle Ages to the early modern period(16th to 17th century). In particular, I focus on the literary and artistic activities of the Uesugi, lords of Echigo(modern Niigata Prefecture).

Specifically, I focus on the two materials. First, "Naoe Rhyme Book", which seems to have been referred to by Naoe Kanetsugu, the Uesugi's vizier, when he created renga (linked verse poetry composed by two or more people) and wakan renku (a similar form of collaborative poetry in which Sinitic and Japanese verses alternate in the sequence). With this research assistance, the groundwork has been laid for content analysis. Second, "Zhosan Mondo", a treatise related to Satomura and was a close friend of Naoe. I have completed the research of all the manuscripts and the collection of paper burns, and through the analysis of newly discovered letters, I have denied the possibility of forgery, which had been proposed in the past.

研究分野：中世文学

キーワード：連歌 和漢聯句 武家 文芸

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 和歌研究の充実と連歌・和漢聯句研究の遅れ

従来、武家文芸の研究は和歌に集中した(渡辺憲司『近世大名文芸圏研究』八木書店、1997年など)。しかし、同じ韻文の形式の文芸である連歌・和漢聯句も室町時代から江戸時代にわたり間断なく催されており、中世近世の文学史上重要である。

連歌は、和歌の上句(五七五)と下句(七七)とをひとり或いは複数人で、前後の句と関連させて、一定数(百句・千句など)を連ねる文芸である。武家の連歌では「時は今あめが下しる五月かな」の明智光秀の発句で始まる連歌作品などが有名である。いっぽう、和漢聯句は基本、連歌の形式をとるが、和文と漢文を混合させて句を連ねる難度の高い文芸であるが故に研究上の遅れがある。

(2) 地方武家文芸研究の必要性和地域資料活用の可能性

連歌も和漢聯句も公家のみならず、武家、その家臣、連歌師、禅僧など幅広い階層が嗜んだ点は共通するが、とりわけ和漢聯句の実態解明は、近年ようやく緒に就いたばかりである。

しかし、ほとんどが公家を扱った研究であり(京都大学国文学研究室編『室町前期和漢聯句作品集』臨川書店、2008年など)、武家による和漢聯句を対象とした研究は少ない。とくに図書館・博物館における和漢聯句の認知度は未だ低く、作品は未整理のまま、『国書総目録』や各機関の収蔵目録にすら適切な著録がなされず、所在の把握が難しい。したがって、武家文芸の実態を正確に明らかにするには、各地の図書館・博物館での実地調査で作品を収集し、関連学書との影響関係を論じる必要がある。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は、連歌・和漢聯句及び関連学書の分析を通じ、戦国時代の武家へどのように伝播し、享受されたかを究明することである。その際、上杉氏の文芸活動と上杉氏をはじめ各地の武家と頻繁な交際をした里村紹巴を対象とする。これにより、連歌・和漢聯句のみならず、歴史学・近世俳諧への影響に新しい知見をもたらすことも副次的な目的となる。

3. 研究の方法

本研究では中世末期から近世初期に武家が関与した文芸について以下の3点を分明にする。(以下、(1)～(3)の番号は各年度の具体的な方法及び次節の成果と対応している)

- (1) 武家の和漢聯句の実作に際し利用された韻書(漢句の韻・故事を調べる辞書)を調査し、実作と学書との影響関係を、主に上杉氏の蔵書を対象に明らかにする。
- (2) 直江兼続が記した書状の修辞の特性(どのような典拠を利用したか)を分明にする。
- (3) 武家と頻りに接触し指導的立場にあった連歌師里村紹巴の社会的役割を分明にする。

(2022年度の研究方法)

- (1) 『直江韻書』(上杉神社蔵)の閲覧調査と全丁の撮影を行うための調整を先方と行った。

- (2)『直江状』の偽文書説の再検討のために伝本の収集(マイクロ・紙焼き写真)を行った。
- (3)『紹三問答』の内容分析から連歌師紹巴と連歌作者三甫の分析を行った。

(2023年度の研究方法)

- (1)先方の上杉神社の受け入れ態勢及び撮影業者が決定し、5日間の撮影を行った。11月には書誌調査及び撮影データの納品を終えた。
- (2)『直江状』の伝本の系統分類を行い、基準となる資料を定めた。
- (3)『紹三問答』の全ての伝本の紙焼き写真の分析及び実地調査を行った。

4. 研究成果

(1) 先行研究は当該資料の存在を指摘するが、紹介と概説にとどまる。韻書は和漢聯句に際し、漢句の韻と故事検索に必携の書であるが、和漢聯句との関係性の中で論じられることはなかった。まして900丁に及ぶ浩瀚な韻書のため、冒頭部と終末部が僅かに知られるのみで、全貌は明らかとなっていなかった。しかし、撮影機材費・撮影補助者への謝金確保により、加速度的に調査が実現したことは大きな成果である。今後は、直江が実際に手元に置いた韻書のデータと漢句を照合する作業を以て、内容面から精緻な分析を進める必要がある。

(2)『直江状』は、直江兼続が、徳川家康の上洛要請に従わなかったために、家康の反感をかう契機となった歴史上重要な書状である。偽文書とする見方もあるが、未だ解決には至っていない。そこで、書状の修辞にどのような典拠が使用されたか、という点に着目して、偽文書か否かを判断する糸口を掴むために、伝本を全て確認した。今後は、書状内で使用された語彙と申請者が蓄積した直江の文芸資料中の表現とを照合することで、修辞の面から当該資料の文学史的価値を(1)の内容分析との結果と合わせて明らかにする必要がある。

(3)地方の一介の連歌作者と思しき三甫は連歌論書『紹三問答』の中で、当時武家の指導的立場であった紹巴に批判的な態度をとるが、その理由を分析し、連歌師の社会的役割を再考した。まず本書の真偽について、新たに見出した書簡の分析を通して検討し、確かに紹巴と三甫の交際に基づいて成った論書であることを明らかにし、その成果を俳文学会全国大会にて発表した。なお、諸本の悉皆調査途上で新たに石川県小松天満宮所蔵の一本も見出したことも成果の一つである。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 川崎美穂	4. 巻 49
2. 論文標題 中世末期武家の五山文化継承 国宝上杉家文書『文鑑』の成立をめぐって	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国文学研究資料館紀要 文学研究篇	6. 最初と最後の頁 61-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川崎美穂	4. 巻 81
2. 論文標題 『近衛殿千句抜書』攷 近衛信尹の独吟連歌『三藐院千句』との関係を中心に	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 国語国文学報	6. 最初と最後の頁 1-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 川崎美穂	4. 巻 82
2. 論文標題 『古聯句集叢』の基礎的研究－中世末-近世初期の聯句抜書集－	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 国語国文学報	6. 最初と最後の頁 61-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 川崎美穂
2. 発表標題 『紹三問答』再考 里村昌叱・前田玄以宛三甫書簡を手がかりに
3. 学会等名 俳文学会第74回全国大会（豊橋技術科学大学）2023年10月28日
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 川崎美穂
2. 発表標題 松ヶ岡文庫蔵『古聯句集叢』について 中世末～近世初期の聯句
3. 学会等名 慶應義塾大学国文学研究会（三田キャンパス）2023年11月4日
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 廣木一人，松本麻子編	4. 発行年 2023年
2. 出版社 古典ライブラリー	5. 総ページ数 525
3. 書名 『連歌大観』第四巻 千句連歌集	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------